

科学技術文化の視点から
現代に生きるヒント 第7回

北海道産業技術史から見た北海道の世界遺産構想の将来展望



山田 大隆 (やまだ ひろたか)

酪農学園大学教職センター教授

1946年函館市生まれ。北海道大学理学部卒業、72年同理学部大学院修士課程修了。札幌藻岩高校、札幌開成高校物理教員、この間、北海道教育大学札幌校産業技術学科、酪農学園大学非常勤講師も、2007年から酪農学園大学教職センター（理科教育）教授。北海道産業考古学会長、日本科学史学会北海道支部長、日本産業技術史学会理事、北海道文化財保護協会編集委員・理事、北海道開拓記念館文化振興会理事、北海道遺産協議会遺産選定委員・監事、空知炭鉱の記憶調査委員会委員長等を歴任。

世界遺産と北海道遺産の根本思想

世界遺産（2011年12月現在936件。文化725、自然183、複合28。毎年25件ほど追加認定）は、顕著な普遍的価値を有する文化遺産および自然遺産の保護を図ることを目的とするユネスコ^{※1}の代表的文化運動である。72年ユネスコの世界遺産条約^{※2}成立（批准187国、日本は92年批准）から開始された。世界各国には豊富な歴史性を反映して、文化財資源として多数の遺産群（遺産と遺蹟）が残されている（最多はイタリアの43。中国、スペインは41、日本は16）。

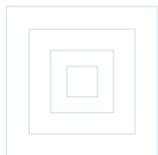
世界遺産（自然遺産、文化遺産、その総合としての複合遺産＝産業遺産の3種類）認定までの道筋はこうである。最初に、世界遺産関連遺産を保持する国内省庁が会議を開催して、世界遺産認定基準（10基準。自然遺産では世界で唯一生態地学、技術遺産では世界への影響の原点、建築遺産では世界で唯一現存など）に照らして協議、国内リストに載せる。これが国内予選（暫定リスト）で、現在日本では12件の候補があるが、92年からのものもあり、認定は容易ではない。その後、国内のユネスコ関係者の助言を基に、自治体は推薦文を作成し、文化庁を經由して世界遺産委員会へ送る。これらを毎年1回6月に各国持ち回りで開催される会議で、現地調査結果を含めて協議し、4ランク（1：掲載、2：情報照会、3：記載延期、4：不記載）で推薦文評価を決定する。4の場合は再提出が不可能となるので、3以上の評価が必要である。自然遺産の場合1（即認定）、文化遺産、複合遺産の場合3から2、1へと世界遺産の評価と改善指導を受けてランクが向上する（07年石見銀山は2から1、11年平泉は3から1へ）。これらの内容の審議は、世界一流の考古学研究者による諮問機関のイコモス^{※3}（筆者は10年度から国内委員）が行う。

世界遺産の趣旨は、文化財的価値（絶対価値評価＝考古学実証提示）のほか、資産を保存し活用する使用価値（自治体、産官学民の保存、整備、活用運動）が求められる。富士山が07年から暫定リストにあって登録されないのは、絶対価値はあるが現状が荒廃という

※1 ユネスコ (UNESCO/United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization) 国際連合教育科学文化機関。

※2 世界遺産条約 世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約。

※3 イコモス (ICOMOS/International Council on Monuments and Sites) 国際記念物遺跡会議。1965年に設立された文化遺産保護に関わる国際的な非政府組織 (NGO)。



後者の不努力が世界遺産委員の疑問を生起した結果である。石見銀山の認定は、大田市と島根県知事、地元財界人の政治運動成果と見られるが、実際は30年以上の地味な考古学発掘研究の実績と英文による国際会議での発表など地元の努力が実ったものである。一方、イコモス委員を加えた国際シンポジウムで現在有力と見られる、九州山口の近代化伝承遺産群（日本初の鉄鋼コンビナート形成）は、登録運動10年で09年に暫定入りしたが、行事中心で実証研究が不足ということと、最近の自治体での炭鉱遺産の連続解体施策がイコモス委員の不信を買い、早期登録は難しい。代替として、11年の田川市の山本作兵衛氏の炭鉱画が記録遺産＝補助遺産として認定された。富岡絹産業史、佐渡金山史（銀の石見と別企画で推進）、長崎三菱軍艦島は、歴史内容、実証研究度から有力で、世界への影響の理由付け次第。金沢市の戦災を免れた歴史町並み遺構は構成資産的には十分で、シナリオ次第。また、世界遺産には認定時の遺産保存の努力が求められ、手を加えると認定取り消しという水準保持の強制力もある（09年景観改造ドレスデンの歴史景観）。基準10「生物多様性の…自然生息地」の絶対価値の危機遺産認定では、地元の保存努力の不足や戦乱、自然災害による消失での取り消しもある。

このように世界遺産は、2001、04年に合計52件を認定した「北海道遺産」の原型となったものだが、単に文化財的価値を認めるこれまでの国宝、重要文化財、登録有形文化財とは多少性格が異なり、使用価値（北海道遺産では思い入れ価値）を大きく評価する、動態的文化財保存運動といえるものである。日本での文化財保護は、これまで1951年の文化財保護法制定後は学会認定中心、多少の利用現状だったが、財政危機や天災等で文化財自体が消失する危機が増大している現在、愛好者が評価する保存運動が先にあり、その後内容の考古学的研究が後続する、いわば逆転の文化財を巡る環境変化になっている。

この現状は、産業遺産の保存と利活用を扱う産業考古学の場合、一層重要な視点となっている。なぜなら、

産業遺産は考古遺産に比べ、学問・学会の成立した歴史が60年代以降（日本では77年、北海道では1年後）と新しく、それまで産業遺産は企業活動終了の産業廃棄物と見られ、また、維持自体も自治体、会社に任せられてきた。工場、機械、サイト（敷地）の保存も特別な技術で保存する必要があるため、費用が多大となるという現状もあり、最近では自治体の財政危機で、将来の維持困難を見越して除却するケースが増大し、産業遺産の保存・継承が危機的な状況にある。

産業遺産としての世界、北海道遺産認定の課題

世界遺産は一度認定されると、世界的価値の褒章認定で各国での経済効果は計り知れない。世界遺産、北海道遺産認定都市は、観光入れ込み数の増加を出現させている。01年に認定されたドイツ・ルール鋼鉱業地帯再生広域博物館運動のエムシャーパーク（89年～）は、かつての「世界の工場」として、第二次世界大戦後の復興を担った民族の誇りの記憶を復活する企画で、認定後は世界の博物館関係者視察と地元の学社連携研究教育活動振興の世界のメッカとなっている。

日本には世界遺産が16件（自然10、文化6、複合＝産業遺産1）あるが、世界遺産の集中地であるヨーロッパのスペイン43、同アジアの中国41と比べても少ない。明治維新後、驚異の近代化を西欧技術の導入で成功させた産業遺産中心の認定が有力で、現在、九州山口の近代化伝承遺産群をはじめ、全国で33系統（北海道では3）のストーリーが、経済産業省発信の近代化遺産認定運動で進行中である。現在の世界遺産では、全体に文化遺産でも建築、土木遺構関係が多く、産業遺産関係は50程度である。11年のイコモス国際会議でも発表200件の中は建築史、土木史、都市計画関係が主で、TICCIH^{※4}産業遺産関係は10件程度でメインでない。イコモス日本委員も建築美術の文化庁関係者が中心。北海道は日本の明治以降の近代化で極めて技術立国的な開発史を有する。したがって、鉱山炭鉱、農業、製鋼会社、港湾と、日本最大級の産業遺産を保持している。世界的にイコモスとTICCIHの共同作業が必要な現在、北海道では特にその動きを強める必要がある。

※4 TICCIH (the International Conference for the Conservation of the Industrial Heritage) 国際産業遺産保存委員会。1973年にイギリスで行われた第1回産業遺産保護のための国際会議の後に設立された産業考古学の研究や産業遺産の保護・振興などを目的とした国際的な団体。